

第 18 回 1F 廃炉の先研究会
議事録

日時: 2022 年 4 月 15 日 (金) 18:00-20:27

開催方法: Zoom

出席者 (敬称略):

研究会代表

松岡俊二: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授

研究会副代表

崎田裕子: NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長

森口祐一: 国立環境研究所・理事

研究会メンバー

遠藤秀文: 株式会社ふたば・社長

井上 正: 電力中央研究所・名誉研究アドバイザー

小林正明: 中間貯蔵・環境安全事業株式会社・社長

菅波香織: 未来会議・事務局長 (途中退出)

宮野 廣: 日本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長

永井祐二: 早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授

柳川玄永: 三菱総合研究所原子力安全事業本部復興・再生グループ・主任研究員 (途中退出)

吉田恵美子: NPO 法人・ザ・ピープル理事長、いわきおてんと SUN 企業組合・代表理事

新しい研究会メンバー

佐藤亜紀: HAMADOORI 13 事務局、福島県大熊町 (途中退出)

高橋洋充: 福島県立福島東高等学校・教諭、福島県浪江町

笠井智貴: 早稲田大学法学部・1 年、福島県いわき市

黒川哲志: 早稲田大学社会科学総合学術院・教授 (行政法)、第 1 次研究会メンバー
(欠席)

小野田弘士: 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・教授

オブザーバー

福田光紀: 経済産業省資源エネルギー庁電力・ガス事業部・原子力発電所事故収束対応室・室長

木原昌二: 原子力規制委員会・原子力規制庁・東京電力福島第一原子力発電所事故対策室・室長補佐

溝上伸也: 東京電力・福島第一廃炉推進カンパニー・燃料デブリ取り出しプログラム部 APGM スペ
シャリスト

岡崎 誠: 東京電力・福島第一廃炉推進カンパニー・廃炉コミュニケーションセンター・副所長

斉藤幹雄: 東京電力・福島第一廃炉推進カンパニー・プロジェクトマネジメント室・地域パートナ
シップ推進グループ・マネージャー

日比賢二: 東京電力・福島復興本社福島本部・部長

福地慶太郎: 朝日新聞社

藤川正浩: NHK 仙台放送局

長谷川拓: NHK 報道局

小磯匡大: 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校教諭

鈴木知洋: 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校教諭

渡邊光希: 福島県立ふたば未来学園高校・3 年 (途中退席)

事務局

李 洸昊：早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・講師

山田美香：早稲田大学環境総合研究センター（福島駐在）・次席研究員（途中退席）

朱 鈺：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・博士課程

松川希映：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・修士課程

議題：

司会：崎田裕子（副代表）

1. 研究会メンバーの拡大について

(1) 専門家・地域社会・女性・若手メンバーの拡充を図る。

- ・佐藤亜紀：HAMADOORI 13・事務局長、福島県大熊町
- ・高橋洋充：福島県立福島東高等学校・教諭、福島県浪江町
- ・笠井智貴：早稲田大学法学部・1 年、福島県いわき市
- ・黒川哲志：早稲田大学社会科学総合学術院・教授（行政法）、第1次研究会メンバー

(2) オブザーバーである報道機関、経産省、原子力規制委員会(NRA)、東電(廃炉カンパニー、復興 本社)などとの関係を強化する。

松岡代表は、以下のようにオブザーバーとの個別協議を実施したと報告した。

4/04（月）13:00-13:35：溝上（東京電力）

4/04（月）14:30-15:05：岡崎（東京電力）

4/05（火）14:00-14:30：木原（原子力規制委員会）

4/07（木）16:20-16:50：藤川（NHK）

4/08（金）13:00-13:30：福田・佐藤（経産省エネ庁）

4/08（金）14:00-14:35：福地（朝日新聞）

4/08（金）16:00-16:35：長谷川（NHK）

4/13（水）17:00-17:25：斉藤（東京電力）

2. 1F 廃炉の先研究会+ふたば未来学園中学校・高等学校(共催)

1F 廃炉の先を考える地域塾(略称:1F 地域塾)(仮)の開設について

(1) 1F 地域塾の背景と目的

1F 廃炉の先研究会が実施してきた 2020 年から 2021 年にかけての研究会、地域社会、国・東電による、1F 廃炉の将来像に関する「対話の場（三者会合）」の実施と評価を踏まえ、「学びの場」づくりの重要性が明らかになった。今後は、「対話の場」の形成と「学びの場」の形成を同時に可能とする「対話の場」のデザインとその実施に挑戦していきたい。

地域社会と多様な専門家や国・事業者などと、1F 廃炉の先（将来像）の選択肢について、共に考える「対話の場」＝「学びの場」の形成として 1F 地域塾を開設する。

2022 年度はパイロット事業として実施し、その評価を踏まえ、可能であれば 2023 年度以降も継続して開催することを検討する。

(2) 1F 地域塾の講師陣

1F 廃炉の先研究会メンバーを中心に、多様な分野の専門家、地域社会、国(経産省エネ庁、原子力規制委員会 (NRA)・原子力規制庁)、東電などを考える。

(3) 講義回数

5 回程度+1F 視察を考える。1 回分は、「90 分の講義+90 分の議論」の 3 時間程度を予定する。

議論の時間は、10 名程度のグループを作り、「対話の場」を形成する。

4 グループから 5 グループを設置し、各グループには司会進行役（ファシリテーター）として未来学園の先生などの参画を考える。

(4) 講義の内容

講義の内容は、1F 廃炉に関する技術的視点、社会的視点、地域的視点を踏まえ、多様な観点と多様な立場を踏まえた編成とする。特に、「社会のなかの廃炉」・「地域のなかの廃炉」という視点を重視する。

1F 視察と 1F 現場における「対話の場」の形成も設定する。

また、1F 廃炉の将来像の選択肢においては、創造的復興研究会において、1F の事故遺構としての保存や 2050 年を目標とした世界遺産登録という構想の議論も行っているところである。ふたば未来学園から、広島研修と地域塾との連携を考えたいという要望があり、広島原爆ドームの保存（1966 年）と世界遺産登録（1996 年）などの広島の経験から学ぶことも講義内容に含めることを検討する。

(5) 講義構成(案、再検討の予定) (敬称略)

第 1 回：開塾式、1F 地域塾の説明と 1F 廃炉の先研究会の説明（「中間報告」、広島研修）

松岡・崎田・森口・井上（研究会）+小磯・鈴木（未来学園）

第 2 回：1F 事故炉の現状と今後の廃炉事業について考える

溝上（東電）+井上（研究会）

第 3 回：1F 事故調査と 1F 廃炉のあり方を考える

木原（NRA・原子力規制庁）+森口（研究会）

第 4 回：1F 廃炉の「中長期ロードマップ」と将来像を考える

福田（経産省エネ庁）+菅波（研究会）

第 5 回：地域社会のなかの 1F 廃炉（事故遺構や世界遺産登録）

吉田恵美子・遠藤秀文（研究会）

第 6 回：1F 視察と 1F 廃炉現場における「対話の場」

松岡（研究会）+小磯・鈴木（未来学園）

講義構成（案）について、委員や関係のオブザーバーから以下の意見・チャット欄でのコメントがあった。

➤ 講義内容の設定について

- ・講師陣の肩書きなどからすると、「権力側の説明の場」であると住民に思われる可能性があるとの意見があり、そうした点への配慮について議論をした。こうした懸念に対し、松岡代表から、1F 地域塾は、1F 廃炉の先研究会・早稲田大学が主宰し、様々な視点を取り入れた「対話の場」＝「学びの場」である。この場では、1F 廃炉に責任を持つ立場にある経済産業省や原子力規制委員会などの公的組織の見解、事業者の見解や地域社会の見解など、異なる立場の視点を聞きながら、地域社会の将来と 1F 廃炉の将来像を考える場である。「権力側の説明の場」にならないように、1F 地域塾のデザインを工夫するとの説明があった。
- ・学びあうという観点で、技術的側面だけでなく、地域社会の視点からの話題提供もあったら良い。地域で関心が高いものとして、処理水の海洋放出、廃炉の安全管理、廃炉スケジュール、最終処分、中間貯蔵の将来、事故の再発防止などがある。具体的なテーマについて、専門家からの説明と地域社会からの懸念点や期待することなどをベースとして意見を交わすのも良いかもしれない。
- ・複合災害というこの地域しか経験していないことを、どう価値と結び付けるかが大事である。1F 廃炉そのものだけでなく、原発事故が起きた後の社会がどのようになるかを後世に伝えていく必要がある。

➤ 説明の仕方について

- ・中高生や地域住民にも分かるように、開催案内の仕方や講義の仕方を工夫する必要がある。
- ・1F 地域塾が参加者に一方的にインプットする場でなく、中高生や地域住民自身の声も多様な立場の人に聞いてもらい、理解を深める機会になってほしい。話題提供の他に、立場の違う意見を出せるような「熟議の場」になったら良い。
- ・中高生だからといって、無理に易しく話をする必要はない。中高生もよく考えており、大人と同じ話を聞いて、十分に理解する能力を持っており、「中高生をみくびってはいけない」。

➤ 参加者について

- ・ふたば未来学園には、中学生から高校生まで幅広く参加してもらいたい。ふたば未来学園以外の中高生や

地域社会の皆さんへ 1F 地域塾の情報をどのように伝えていくのかを考えたい。

(6) 募集人数

未来学園の中高生 15 名、地域社会 15 名、オンライン 15 名、合計 50 名程度を考えたい。
参加者の選定は、塾の運営組織が行う。

(7) 1F 地域塾の開設時期

2022 年 7 月頃に第 1 回（開塾式）を行い、9 月から 10 月頃に 4 回程度開催する。土曜・午後に開催する。
最後（第 6 回）に 1F 視察を設定する。キックオフ（開講式）日程は、7 月 16 日（土）を第 1 候補、7 月 9 日（土）を第 2 候補として調整する（9 月の可能性もあり）。

(8) 1F 地域塾の会場

ふたば未来学園（福島県広野町）+オンライン（Zoom）

(9) 1F 地域塾の運営組織、事務局および費用

1F 廃炉の先研究会は、代表の松岡が主担当、副代表の森口さんと崎田さん、さらに井上さんを含めた 3 名を副担当として進めたい。未来学園は、小磯先生を主担当、鈴木先生を副担当して進める。南郷副校長にも、適宜、参加いただきたい。また、早稲田大学次席研究員の山田さんは、早稲田大学・1F 廃炉の先研究会と未来学園との調整を担当する。1F 地域塾の事務局は、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター事務局が務める。塾開設・実施に要する費用は、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・復興知事業から支出する。

(10) 今後の予定

5 月中には 2022 年度・1F 地域塾の開催要綱・案内をまとめ、参加希望者をオープンに公募する（開塾の時期により柔軟に調整する）。

3. 第 2 次中間報告(1F 廃炉の将来像の多様な選択肢の提示)の作成について

1F 廃炉の将来の選択肢について、「第 2 次・中間報告」としてまとめたい。以下の 4 点を中心に検討したい。

- (1) デブリ取り出しの選択肢
- (2) 廃棄物管理・処分の考え方
- (3) 事故遺構としての 1F 保全の可能性
- (4) 地域資源としての活用策

特に、上記の (1) と (2) ついては、キーとなるリソース・パーソンを講師とした研究会を、秋以降に何回か設定することを検討する。

出来れば、2022 年 7 月 31 日（日）に開催予定の第 10 回ふくしま学（楽）会でアイデアやコンセプトを議論し、2023 年 1 月末に開催予定の第 11 回ふくしま学（楽）会でドラフトを発表し、広く議論をしたい。

4. 今後の研究会などの予定について、その他

5 月 16 日（月）18:00-20:00	第 4 回創造的復興研究会
5 月 27 日（金）18:00-20:00	第 19 回研究会。藤原広行・防災科学技術研究所マルチハザードリスク研究部門・部門長による「東日本大震災の教訓を踏まえた地震動研究の現状」をメイン報告とする。
6 月 24 日（金）18:00-20:00	第 20 回研究会。竹内真司・日本大学文理学部教授（地球科学）による「地下水流動からみた福島県阿武隈山地周辺の放射性セシウムによる汚染リスク」をメイン報告とする。
第 1 候補：7 月 16 日(土)午後	「1F 廃炉の先を考える地域塾（1F 地域塾）」（仮）の開講式・第 1 回

第2候補：7月9日(土)午後		
7月31日（日）10:00-17:00	第10回ふくしま学（楽）会	
11月頃	創造的復興研究会主催のシンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F 廃炉の将来像を考える」（2021年11月14日）に引き続き、第2回のシンポジウムの開催を検討する。	
本年度中	1F 廃炉の先研究会主催のシンポジウム「1F 事故調査と廃炉の将来像を考える」（2021年6月19日、2022年1月15日）に引き続き、第3回のシンポジウムの開催を検討する。	

以上